

## 「書く力」の鍛え方

薮塚 謙一 氏（株式会社朝日新聞社長野総局長）

書く力は社会とどうつながるか、というお題をいただきました。僕は、書く力で一番大切なと思っているのは、相手に伝わるってことだと思うのです。相手に伝わるためには、文章がうまければいいかというと、そんなことは全くなくて、実は、自分の主張もしくは思いを相手に語る際に、相手に説得力を持って伝わるかどうか。説得力を持って伝わるというのは何かといいますと、背景に主張の「根拠」があるかどうかなんです。この主張の「根拠」、具体的なデータが背景にないと、いくら熱心に語っても無理なんですね。

例えば、学生のエントリーシートでいうと、「私は粘り強い性格です、どんなときにもくじけません、何時間でも頑張ります」、「この粘り強さを御社で生かしたいと思います。」これ、全く伝わらないわけですよね。抽象的な表現だけでエントリーシートを書いていると、途中でもうはじかれてしまいます。客観的データで、私は週何日間、こういうアルバイトを続けました。こういう内容があって、このように克服しましたと、そういうことをデータとして示していく。体験をちゃんと語れるかということが非常に大事なことだと思っています。

論拠を持って物事を語る、主張できるということは、そのこと自体が社会に出たときに非常に役立つ。誰かに何かを話すときに、あいつの言うことはよく分かるよなって言われることが大事だと思います。

最近は自分をちゃんと客観的に主張できるということを大切にしている大学が増えてきているようで、新聞投稿をさせたいので、その指導をしてくださいというオファーをいくつかの大学からいただくことがあります。そのときによく言っているのは、自分の体験をちゃんと具体化するために、5回は繰り返し、自分に問い合わせましょうと。そんなこともゲーム的にやりながら、話を深めさせていくことをやっています。

今日はパワーポイント画像がなくて申し訳ありませんが、資料は作ってまいりましたので、ちょっと見ていただけますでしょうか。「仲間の文章で学ぶ」というところから、16ページ分もあって申し訳ないのですけれども。よろしいですか。

最初の資料【配布資料 P1】は、九州の旧国立大学から「新聞投稿の指導を」と言われて行ったときに作ったものです。ループリックも多分、学生たちに理解させていくのはなかなか難しいところがあるので、手の掛かる作業ではないかと思います。文章を教えるってやはり、かなり手の掛かる作業なんですね。このときのオファーは、60人に新聞投稿をさせるための90分授業を1回でやってくださいというもので、うーん、なかなか厳しいなと、最初は思ったのです。

1年生の授業で9月に行いました。大学のほうが「大学に入って」っていう大きなテーマを出していて、学生それぞれが大学に入って数カ月間の自分を語る。一応、見出しを立ててもらい、600字程度の作文を書いてもらいました。60人分全部、事前にいただいた

## シンポジウム

「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす 一ループリックの活用と課題ー」  
2015年9月12日（土）14:00~17:30 於：津田塾大学小平キャンパス

それに「あなたがこういう主張をしたいのなら、この辺をもうちょっと深く掘り下げて具体的データ、具体的な体験を書いてください」と方向性だけ説明をして返しております。そのうちの1人について作ったのが最初の資料です。

授業の1週間前ぐらいにメールで一度やり取りをして、私の方で掘り下げるべきポイントを学生に示しています。「仲間の文章で学ぶ」ということで、冒頭に1枚付けてあるのは、僕が授業の冒頭で説明をした内容です。Tくんという学生のサンプルを作っていますので、そのサンプルを読んでみてください。僕が質問をして、Tくんが回答をしている文章ですよ、ということを説明しています。

まず、Tくんの作文【配布資料P2】。家族という存在という文章です。読みながら、この辺を掘り下げたら、この文章は良くなるかなとか、面白いかなという所にちょっと下線でも引きながら読んでいただけますか。

この作文、文章としては悪くないです。別段、破たんしている所はなくて、やはりしっかりと勉強をしてきた子だなっていう気がします。ただ、訴え掛けてくるものがここにはないなというふうに感じます。例えば、家族を非常に大切だと思っているとか、ことにお母さんについては偉大だとまで語っているのに、偉大の根拠がこの文章にはないですね。なので、私の方から事前にメールを1通投げて問い合わせています。それが、その次の資料【配布資料P3】。当方からの質問です。

新聞記者ですので、質問をするのが仕事です。こんなことばかりやっているわけです。いくつかの大学、専門学校でも同じように質問をしています。学生は平板な文章を書いてくるのですけれども、その背景を探りにいってあげると、かなり豊かな回答を返してくれます。その次の1ページは彼から返ってきた、質問への回答です【配布資料P4】。

メールで1往復だけなのですが、この回答を見たときに、僕は非常に驚きました。最初の文章に比べてまるで違う内容が返ってきていますね。この学生が特別なのかなとも考えたのですが、先ほども申し上げましたように、僕は専門学校も含めて何ヵ所かでこういう作業を繰り返しています。いつも必ず、結構な内容が返ってきます。今の学生って、結構同じグループの中で似たような思考形態に見せているのかなというふうに思いますけれど、それが一番安全なのかなと思っているのかもしれません。実は内面にはとても豊かなものがあるのかなと感じました。

その次が、「若い世代」【配布資料P5】とありますけれども、これが私ども朝日新聞に投稿した、この学生の文章です。一番下「一人暮らしで母の偉大さ知る」として掲載されていますね。僕は何一つじつておりません。書き出しへは、お父さん。このとき、僕はフィナンシャル・プランナーとは知らなかったのですが、お父さんが仕事辞めちゃったところから書けば、お母さんのすごさが分かるんじゃないのっていうアドバイスはしました。彼が回答の中からデータを取って、この文章を書いています。

今回のこの文章の中で見ると、3段落目の、「最近一人暮らしを始め、母の大きさを実感した」っていう所がこの学生の主張です。それ以外は全部、事実の羅列というか、それを

## シンポジウム

「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす 一ループリックの活用と課題ー」  
2015年9月12日（土）14:00~17:30 於：津田塾大学小平キャンパス

系列的に並べているという文章ですね。つまり、主張はごく一部で、その主張を裏付けてさえいれば、相手を説得できるといいますか、説得力を持って伝わるというところがあると思います。

ちなみに、上の二つは別の大学で僕が教えていた女子学生2人の文章です。これもなかなかいい文章なので、ぜひあとで読んでいただけたらありがたいなと思います。

もう1枚めくっていただいて、「仲間のESで学ぶ」【配布資料P6-7】というのが出てきます。この学生は、実は津田塾大学の学生さんで、エントリーシートを書くための講座を朝日新聞で請け負いました。80人のキャリア塾の講座なので、4人ぐらいの学生さんのサンプルを作って、僕が問い合わせて、回答があつて、回答を踏まえるとこういうふうな結果になりますよというのを僕のほうで解説をしています。その資料です。

これも、皆さんが読んで分かるとおり、津田の学生さんですので、文章として何か問題があるということではないのです。3点、僕のほうから問い合わせています。その裏が彼女の回答でした。これはデータが背景にあるわけじゃないので、こういった場で大々的に言うような話ではないので、参考としてちょっと聞いていただければいいと思います。

小学生とか、中学生の作文を読む機会を持っております。小中学生の文章と比べると、大学生の文章は、書法は必ず抽象的です。具体性がないなというふうに、僕は思っています。膨大なサンプリング調査をしたわけではないので、僕の印象論でしかないのですが。もしかしたら、大学受験をするときに、具体的に書くという作業をどこかで欠落させてきて、結論だけ抽象的に書くという訓練を受けてきている節があるように思います。大学受験に関しては、この後は論述が随分入ってくるように聞いていますけれども、これまでのテストを見ると、長文読解で読解をした結果、筆者は何を考えていますか、筆者の思いを100字以内にまとめなさい、というようなことで鍛えられてきているのかもしれない。なぜかというと、具体的に書いていくと、どんどん文章が長くなってしまいますよね。なので、最初から結論を抽象的にまとめ上げていくという訓練を受けているのかもしれない。推測でしかないのですけれども。なので、具体的に書くということを欠落させてきているような気がするのです。

エントリーシートの添削は随分やっているので、それを見るたびに思うのは、文字数制限の中で書こうとするので、どうしても抽象的に自分の主張をまず述べるということを覚えて書いてきます。学生に、「いや、具体的に書かなきゃ駄目だよ」と話す、と、学生は、「そんなこと言っても、文字数の制限があるから、具体的に書いていたらいくらあっても足りません」と返ってきます。「ああ、そうかい。じゃあ、書いてみようじゃないか」と質問をすると、さっき言ったようなA4、1枚分ぐらいの回答を書いてくるわけですよね。その中から活用すべきデータを出していく。

この原稿でいうと、2段落構成になっている元原稿がありますが、元原稿の1段落目で言っていることは、「挑戦して妥協しないで出会いは大切にと心掛けてきた」ことだけなのですね。それを4行も書いているのが、このESの致命的な欠陥だったのです。

## シンポジウム

「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす 一ループリックの活用と課題ー」  
2015年9月12日（土）14:00~17:30 於：津田塾大学小平キャンパス

「挑戦して妥協しないで出会いを大切にしている」ということをデータで裏付けなくてはいけない。僕のほうで作り直してあげたのが下の文章です。これは、サンプルとして僕が作っています。赤字の部分は全部、元原稿にはないデータになっているわけですね。こういうデータがこれだけ入っていて初めて、「この思いは私の財産だと思います」と主張をすれば、「ああ、そうだね、本当にこれは財産だね」と、読み手は感じるわけですよね。データがあるから、そう感じることができる。

もう1枚めくると、「仲間の原稿で学ぶ①主張の理由をしっかり書こう」【配布資料P8-9】とあります。これは、ある専門学校の生徒さんの文章です。

もう1枚めくって「、仲間の原稿で学ぶ②主張をデータで裏付けしよう」【配布資料P10】というテーマが設定してあります。「サポーターの日常」、これはエントリーシートではないですが、「自分の感じていることをまず書いてみよう」とこのぐらいの短い文章を書かせて、その上で、僕のほうで質問を投げ掛けたりしています。

下線が引いてある所が具体的データで裏付けよう、というふうに説明している部分ですね。その下線部を中心に裏付けのデータを引っ張り出すための質問がその下です。講師からの質問と筆者の回答とがあります。この回答と元文を踏まえた修正原稿は、もう1枚ひっくり返すとあります【配布資料P11】。

ざっと読みます。「Jリーグのシーズンが始まった。私はここ5年、横浜マリノスのサポーターをしている。毎週末の試合が楽しみで仕方がない。試合を追いかけるために努力している。まずはチケット代や遠征費、応援のときに着るユニフォームを買うための資金を週2回、月4万円のコンビニバイトで稼いでいる。これまでに北海道から九州、佐賀県まで15都道府県を巡った。普段は僕約を心掛け、学校には水筒でお茶を持参している。毎週末に楽しみがあるので生活にメリハリができ、勉強も苦にならない。試験前には、試合へ向かう電車の中やスタジアムの開門待ちの列で参考書を読むこともある。チームが調子良くて悪くても、週末が楽しみだ。人生を楽しむ方法を見つけることができ、本当に幸せだと思う。今年もJリーグが始まってうれしくてたまらない」

ただの追っかけの学生っぽい最初の文章が、彼がいくつかキーワードであげている、「日々、勉強やアルバイトで頑張っている」、「週末のために」とか、「メリハリ」などという言葉の背景をちゃんと聞いてあげると、こういうデータが出てきて、あ、この学生はただ遊んで、サッカー好きなだけではなくて、サッカーを見るために計画的に物事を組み立てられて、さらに、本来の学業も忘れないで、努力できるのだという主張にガラッと変えることができるわけです。そうなると、例えば、これがエントリーシートだとすると、ただサッカー好きなだけの学生だったら落ちますが、計画的に自分の日常を設計できる学生であるとすれば、企業は採ります、ということになっていくわけです。

最後【配布資料P12-15】に、これはまた別の私立大学になります。僕はずつとコミュニケーションとか、新聞を活用して意見交換をして、そして自分の考えを深めるとか、例えば、何かを主張するときに、自分の主張が多少とも社会の中で珍しい主張なのか、もとも

## シンポジウム

「大学教育における『書く力』 どう測る どう伸ばす ループリックの活用と課題ー」  
2015年9月12日（土）14:00~17:30 於：津田塾大学小平キャンパス

とあるような主張なのかとか、そういうこともよく分からないと、主張にも何もならないから、新聞を読んで勉強しましうね、みたいな授業をします。15回の授業の最初と最後に作文を書かせてています。課題は自由にしていますけれども、その作文の最後に朗読会をやっていました。その朗読会のときに、聞いた朗読について評価をして、自分の作文も含めて評価してみようというので、ここに選抜した学生たちの作文のタイトルを並べてあります。なかなか、多彩なタイトルが付いてきて、タイトルを見ているだけでも結構楽しいです。

作文を書かせるということについて、最後、まとめます。僕は大学教育学会みたいなところにはここ3年間ぐらい行っていて、ライティング部門の所で話を聞いているのですけれど、アカデミック・ライティングとパーソナル・ライティングの葛藤、闘いみたいなものがある。9割がた、アカデミック・ライティングをどうするかという勢力と、それからパーソナルなライティングをもう少し重視してもいいのではないかと。それはなぜかというと、書く楽しみから教えなければいけないから、というふうな話で二つ分かれています。

僕は、アカデミック・ライティングとパーソナル・ライティングは、何がどこまでどう違うのだろうかということを、そういう会場でよく考えておりました。例えば、説明の根拠となる情報が明示されているなんていうのはアカデミック・ライティングでも絶対必要ですよね。それから、パラグラフの構造であるとか、そういった要素について言うと、作文を書く中で空想を書くというわけではなくて、自分の体験を根拠として、自分はこう思っている、自分はこういう人間である、自分は今回のことについてはこう思う、なぜならば、これこれ、こういう体験をしてきているからだ、もしくは、これこれ、こういう体験を私はしてきた、だから、こう思うという主張を書いていくということを基本の段階から教える。その意味で言うと、どれくらい差があるのかなという気はするんです。

要は、自分が何かを主張するというときには根拠を示しなさい、それがものを書く、ものを語るときの基本ですよっていうことを伝えてあげる、しかも早い段階で伝えてあげたほうがいいかなと思います。

もう一つ、意味があって、先ほど示した新聞投稿文章なんかを見ても分かるとおり、学生たちって結構苦労して大学に入ってきていたりする。だから、僕は初年次には根拠を持って語るっていうことを伝えるとともに、その根拠を示してきて、例えば、苦労していたりする学生って結構いるわけですよ。その子たちに1回褒めてあげるというか、あなたの体験っていうのはとっても価値があるということを一度伝えて、学生生活をスタートできたら、とてもすてきなことだろうなと思って、こんな授業を続けてきました。

ちょうど時間になるので、ここまでにします。ループリックの話もそうですが、学生さんの力を引き出してやるのは、多分、すごく手間の掛かる作業だろうとは思うのです。今の子どもたちってやっぱり、語れずにはいるいいものを結構たくさん持っているのっていうことを感じてきて、勉強になったなということもあるので、それも含めてお伝えして、今日のお話に代えたいと思います。どうもありがとうございました。